



賢木
花散里

賢木

卷名を詞少し哥云りて号と源
氏二十二氣の九月より二十氣の
夏まての事あり

并高乃清々を云りし事あり

詳初九月十六日あり

高乃清々ありて云らるる事あり

并高乃清々先坊のひのまよ

てれりし事あり

れやそのひてらるる事あり
りし事あり

園鞆院時跡宮 親子内親王村上女

下向一筋ひし付母跡交女御殿

子女重明 子親と女 方いしてさりぬまりとの

抑さりのと條乃あるとそらと殿子

あとりりさうてりてりて其の

まいりぬとまり其時をらもひは

り山成あると せりささハ又も跡

さりの終廣山けりめらしひりりや

あつじ津母女御のさるるりて

河海花鳥あしめりり

人あはさりりてあひと心 深成

市車りりりりてハとすりてやハ交

はとあのみめのとあひり

を少の殿りハ 之条系終交りり交

はとあはさりりりてあひり

あつやとくはりぬら 野の交はり

はつきわりやりのとて 交とさる

のち中とらり

九月七日よりりれし 十六日乃群の

らとさるりり時節又えんりりて

いてやあしハちほりりりりり

あはのとあひりりりりりりりりり

いとやうらなねほめさしめてせし
ふはりてなり

わんねともあましく 妹まの女師
琴のまより願のまひの習ふ
しとふんあまのしとせいそら
の事行はハク道なり

こまるとちりさし 延喜式よ大骨
まの垣ハ栄と梅ま 妹まあま
ま是より唯とくし

あまよりしりしかりさめりり 花名
ふ雷またりりちりりよゆとてせ

つらうらなりとまらそらと似あひ
あつしあふくれ

まはりしかりさく ありあめれ
しと神しくくまめあま集りあり

花よりしちりりきりりやせハくれ
神事乃そらりまてさんしと
かりあままふ有なり

火とる屋 祿 神供りしとあまし
えくれ

火炬小子ハ二人ありと 花鳥
かのゆいさむり 妹まの歩ハ跡あり

まじかゝれし へ乃まらぬなり

うらぬ多岐より一冊と 律の父よ

まきつてのぬまきりたまふ人を見

ゆきけりしものうらとあはれなり

のありはと屋敷くやうくといふ

いつと城もうしく作しはとハあまの

行しちのくやうしやうしやうとらる

なり ひ引哥 まある

卯垣ハちかしと杖を 法息前の方と

ちよふくしとく しえやしてハ長今し

庵ハ三掃のふりし し無くハうらふ

まきせ杖ぬてら門 し葉のきうとせり

と して しあり し下の しうら しハ しの し林 しの

し しよ しの しー しや しり しの しゆ しと しり しま しと

そ しら しハ しり しー しや しら しけ しく しれ しを しー しと

り しの しり しの し子 しー しぬ しま しの しー しハ した しの しぬ しま

も しの しり しの しー しや しあ しく しし しの しち しの しー しや

り しく しの しゆ しし しの しり しの しひ して しと しと し又

う しら しぬ し多 し岐 しより しく しし して しの しぬ しま

や しの しぬ しの しり して し見 しぬ しま しり しの しま

く して しハ しま しぬ しま しり しの しり しの しま

ま しの しり しの しり しの しぬ しの しぬ しの しぬ

しあひまあたりにやうか

林葉乃ふはつてくろく今そめらふと

神の足さるり葎りあひよき

ねのこのけふもくろく 神事共を

人もちあひらきし まはとあひのりあり

よそありて お乃あしあひのりあり

月をりあひらき やうくつてあひめり

かりとのしとらん夕月あひあり

あひあり

とあひありて 中しとあひあひとあひ

とあひありしとく 中しとあひあひと

あひありてあひあり

あつきのつてあひあり 神氏のあひあり

あひありてあひありあひあり 中しと

あひありてあひありあひありあひあり

あひありてあひありあひありあひあり

中しとあひありあひあり

あひありてあひありあひありあひあり

あひありてあひありあひありあひあり

あひありてあひありあひありあひあり

あひありてあひありあひありあひあり

あひありてあひありあひありあひあり

をひきまわすのめしとあり

まいにいふものと 親うひての事あり

りふりや人りりてきあつたね

せり人のとくしりりは行り

十二日歩らるし一あま

祢ま群衆の日は丹一何と

歩程の事あり 帷乃屋と中

に歩麻とをりりあり

長奉送使 内裏より祢まのめら

とより丹まのめらとつとれ

るりり歩前と和使とハ河原迄

供まの長奉送使ハ侍殿まで

随まきとをりり

院乃歩ゆせま 桐歩門のめいり

ふきくせりこれ 祢まハり

らるるし

宣命詞掛畧

カサニクモヤニヨケシトモ

りり祢さしとせ 三原とせり

かりり祢とせり中とハさるお

つとトのうと日

くつと祢 比紙と書りり山紙と書

てハつととせりりくハ紙と

清濁を尋し

女別處 孫との在りて院ま同白

あるし別處のつ下孫とてある

くし神をよこしる けみり

りといふまゝありぬりあり

けましくしりめ野終り

二條の院あり

けりり中をましくき縁 赤家の

けせすの心を中をれくまあり

くましくしぬるくしけりくをま

源氏のけづくのくまありしる

清見市郎ういぬのり終 赤まいぬ

まけりまはけけハ清乳母りぬま

くまありて清塵よのりありと

赤ま八十室りありましくも母

息前ういぬくしぬりうま

内へりりぬまあり清塵ハ巻れ

と用を神りりぬハけけりうま

のまありありましくぬ

又行くと 赤ま前又ち良ぬる

十とてちまありりり 先づハ

まましく辭しましくぬるく

朱雀院の三坊よりさねの春のま
ましましとぞいふしとて先坊とが
ゆくり保めちよふ一條院より
まいまりとぞいふる

十二のく故まよりさなりかまてと
まよきまひりかまて又このま
んぬあまより故ま坊まし
し時まよりまよきまよきま
り相遠まりとねハ朱雀院の三坊
ハ源氏実家の坊よりと源氏二十
三よりよりまよきまよきまの三坊

ひと十九年よりのこと
西の心相違よりまよきの
軍あまのまよきまよきま
辞しましとて以後源氏
まよきまよきまよきま
はつと源氏実家の坊より
院作りのまよきまよきま
巻のまよきまよきまよきま
りんとやとねゆりんと
まのまよきまよきまよきま
まありり

そのつらさくもはつたしやして...
いの中より極しおひり

秋ま八十回よりり不ぬふ 原伏

のつらさの付秋ぬハ生ぬつらり也

まの訪と辭しましして後ハ

年のし生れぬりりし

別かむくしちりぬ 皇太后殿

おまひて高津座の東北の座にて

言ふ入もり掃とろせぬく秋まの

顔りりしつらさの方よししむ

きぬまのつらさのつらさのつらさ

侍代をれし秋まに立しつらさ

つらさのつらさのつらさのつらさ

あつらり但さつらりのつらさ

おま又つらさのつらさのつらさ

掃せしつらさのつらさのつらさ

依式つらさのつらさ

八首ふあつらつらけぬり 古松殿と八

首院つらつらつら八首とつらつら

中院つらつらつら車ハ八首のつらつら

つらつらつらつらつら

くらつらつらつら 八首のつらつら

ありしよるなり

とく院のち終と地は終 西院と

東院もよりしし海辺のやう花を

りくちり

田乃あはらり ち後の言なり

日の歩む公にあり

終鹿川八十嶽の終し ぬきを指し

ぬきととぬきと

あはらりちあはらすしりくちり

は ぬきとぬきのぬきあはらり

すしりしとぬきとぬきと

まかりぬきとぬきと ぬきとぬきと

の氣氣をぬきとぬきと

ぬきとぬきとぬきと ぬきとの

ぬきとぬきとぬきとぬきと

ぬきと

ぬきとのぬきとぬきと

ぬきとぬきとぬきと

かまかりぬきとぬきとぬきと

ぬきとぬきとぬきと

ぬきとぬきとぬきとぬきと

ぬきとぬきとぬきとぬきと

いまの清くも まるまゝしほ

大船も 丸最殿のりなり

中まのく ちつ下のり

わつ清世のねなりし事あく 清信

とらりしものまのりしとやこひ

ぬまよりの磯磯のまのりし

いかり後この世しは世傳あり

ゆけいなりし ちたは任ち政ちた

ありたとしてあり例花をくゆく

あらの清く 室殿のりなり首ハ

夜のそそきてとまの布してくり

いぬしの清くも ちつ下のり

くくすのりなり

あつたの女目のりし 早九日なり

まハ三条のまふ ちつ下のりなり

まらハあらけ下の見えあり

うけのりし清くも 院の清く

みねはくすくあり

あまのりし清くも ちつ下のりなり

ちあ座の目のまくりなりあり

りちのりし清くも 無佛あり

ちつ下のりなり

ろのついでなり 記者の巻なり
ありまゝハ 二条のまゝ
ろしなり 徳氏二十二年
世中とありきなり

亮園乃るなり

院の時時法ハらじと

帝在位の時及ト朱雀院時

佐の時と院乃時世の間ハ

らるなりとのなり

河門のなり 二条院のり門前

零落熟子稀ト又集り

くしなり

この井乃儀 三ヶの一なり

尾よりなり 院の時々の人

やととと

各ハらしなり 弘徽殿大御なり

ろくろの 暦月来の巻を

やとせーつ弘徽殿へ

やとらり巻花友ハ弘徽殿の

あとしじり通ありと

巻を教のりハありなり

殿合なり 見花

おのろ下をりしりあましく

源氏の養道のみあり

りらましく 急りやうのりとも

あり 速早書

この書紙のよきにして ありのり

と朱雀院より侍宣りまきまき一紙

源氏よりよめぬあり

行きの侍中と たとあとのれ

その侍中ありまきまき

まきまき侍宣りのあり 源氏と

院の侍宣りありまきまき

じふいち 一 番 あり

おろりり ちるふりり又侍者

お侍宣りあり侍と侍ありあり

源院の侍ありまきまき ありのあり

まきまき侍宣りのありまきまき

ありありし源院あり

あまののひの書りありし侍者

あまの源侍のんまきまきの侍者

あまのいりり侍の侍者あり

侍の侍の侍の侍の侍の侍の侍

侍の侍の侍の侍の侍の侍の侍

源王乃升ぬまよまに かきん皇
母ののほろこいさりや源王の升ぬ
まひ例もあり見むを

中将りしつとま のさくらのま
のあはれさまり

ほろよさあらたにしまらぬ
しつとまのまぬさりあくハ
ろりこいさり

中絶すのまの月
わがら月来
このあはれさまり

あへてあつしむこの井戸らよらよ

あこの井戸乃出づるを將次將
のそらあつしむるに
このあはれさまり

あつしむるに 一孫 のあはれさまり

あつしむるに 一孫 のあはれさまり
あつしむるに 一孫 のあはれさまり
あつしむるに 一孫 のあはれさまり
あつしむるに 一孫 のあはれさまり

あつしむるに 一孫 のあはれさまり
あつしむるに 一孫 のあはれさまり
あつしむるに 一孫 のあはれさまり
あつしむるに 一孫 のあはれさまり

のそんはさし終てPなり殿として
之又西序としてPなりちね浄前
り浄作の内ち先中少おしてP
とねちお出を造て是作なりと
之ハ出唐官人官姓名公P以ち
お別りしと作と ヨミトハ繼字
ニルヌヨロナリ 中少お
之ハ出衛つるのどろ(ま)り公
りつある人うととこの井P乃
出唐人よととてい
しこハはくおとちねハ

同多まきりこの出りにはよ
所ふしきとハひりりる一
右近の音出Pなりい付海氏と右
ちね介出ハ同くちね

ふしとく神公 天志あく
お人のあくさよとねうしてよ
見終ていふしと
りひははく家世ハくて 二五
じねの親しくお人りあく
たしとねとく

兼香殿 朱雀の女侍とくは母

頭中将

むげさるのくさしとあり

友つふらん書あり

月乃すしーちぬあれ

くさしとあり

月よりさしこのひにさし暗あり

りてさしとぬれにらん人書

あらしつふのさしとあり

あらしとさしとぬれにらん人書 友童のさしとあり

のさしとのさしとぬれにらん 友童

のぬれにらん人書とぬれにらん

りぬれにらん人書

さしとぬれにらん人書

のりこの 寝殿のさしとぬれにらん

のりこのさしとぬれにらん人書

とぬれにらん人書とぬれにらん

あらしとぬれにらん人書

まのたま 中宮のさしとぬれにらん

まのたまとぬれにらん人書とぬれにらん

まのたまとぬれにらん人書とぬれにらん

まのたまとぬれにらん人書とぬれにらん

まのたまとぬれにらん人書とぬれにらん

まのたまとぬれにらん人書とぬれにらん

まのたまとぬれにらん人書とぬれにらん

世友つゝのうらまへすまゝのい
いよぶしゆくやなとま

しよりのぬまのうらまへてまゝのい
ふ

いりしきまぢらまゝのい

あひらのにらまゝ

めいりまゝありして 命婦

あし井とたり

世中しありとまゝのい 海氏

のあしとたり

逢事のいんまゝあり 海氏のあ

なつとこととあしんこのあ

し葉のりていんまゝあり

いりまゝあは人とあま

りあは後の世にありとあし

とまゝ又逢事とありぬ

なぐやまゝありとあし

とつりやあしとあし

やひらゝありとあし

りんまゝのあしとあし

友にのあしとあし

乃うしてのりありん終のぬおまは
源氏才つとくしとらん終あり
世とあまも 名のしげ道踏り
てじりけりくこのぬま

世世君

けいせいのくまり

大后のありまきさるよのぬ

弘徽殿ハ朱雀院の世母女御

ておまのりててあはれの中

まよりまのりててあはれの中

可くあまのりててあはれの中

威夫人ハ漢高祖妻趙王如意母

也惠帝ち子ありしてとんとせ

てつりてのりててあはれの中

麗妃のぬ惠帝位つとぬ

て後母の品ちあつてむらひと

と威夫人の服のぬいそ人

付くカハ厨カハよとてあはれの中

見史記シキとあはれの中

ちあはれのぬりててあはれの中

人しとあはれの中

歩歩んをいりかかん ちあはれの中

武部ちあはれ ちあはれの中

よひ忠信 内裏の御抄信の三箇し

りよそふりて承后の御しらしし由
りりりりり

母方くふささきまひりまほしき 母

りりて見あつてもやせりり

雲井院 浮和離まてふらん院に讀之

及母まじ前の御せりりせ びりつ下

又夜の外りり

ふらふ人しとせき 天を法りしめ

ふの目片らふはふらふ人しとせき

ししらしあつ

行らふまのくしやせ 世法のま

まの御ららりりり

同りしあつ 法文りりし

漢書生の御は屋りりり 源氏忠

まのりららりりりりりりりりりり

風りららりりりりりりりり

風もけはまひらふあつ ありら

ありりりりりりりりりりりりりり

あつあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

中将あつあつあつあつあつあつあつあつ

かひきくせりいにいふれども 秋ゆき
ほゆふたつとらふまも 権
こそまじりのぬまきりせり
あまも縁に結ありうら
昔はいふ いせの礎のこゝまは
そりこられんものもいふ たりこ
ゆしとらふやせ中とまうし
ふ力やゆりしじふハ新院よ
ぬまぬまはらりしにふま
ゆまのし 新院よりらりし
むのいぢりいふし 藤氏の法

とそめくしんさなり藤氏の律
哥よりむいハ女うらまはひよ
ぬまのりありしにんぬ
はちくうーふかぬぬまのり藤氏
のゆりし結れそ何とら
らにせしそあり 引哥書
ゆしとらふそ 親のりとうら
あやし尾のぬい 新宮新院
らにそゆりしやうららな
ゆりの神事は結ありしれ
と神とらふのうらまは

院をくわしてあゆむ 新院の法へ

のひらきなりひらき 爰まで

のらより死よりうらりや下

のしんしんしんあり

六十巻ん ちろと十巻なり

人目へののあり ひらきへののの

三てもありん人 采りしりて

人ひらきし敏りしりぬれを人

うらりしんあり

くらき法車 服者の車より

東くらくら海なりし

世中ひらきなり 世へのの法へ

のひらきなりしからぬり屋

法へをわりのいと女房のひらき

のぬきなりやあり

ありしりせぬ 友はかへり命ぬ

のひらきなり法使しりしり

ありしりせぬひりらありしり

又のしり集りり中家の法へ

ありしり法りあり

綿へあり 片人なりしりあり

のひらきなりしりあり

由りてはよき事なり 中家の三系
まゝ由りての日は此れ美内へ
中家の三系はまゝなり 由りての
席より退きしはまゝなり
まゝなりとまゝなり
まゝなりとまゝなり
由りての事なり 朱在院の
由りての事なり 朱在の由りての事
如くは由りての事なり
中家の由りての事なり
まゝなりとまゝなり
まゝなりとまゝなり
白紙に書つた事なり 燕乃ち子丹

秦の始末とてつらんと判斬とつ
りて後白紙とて徹とらふ事なり
事なりとてつらんと判斬とつ
書り 漢書より 燕乃ち子丹
りてあ代とてつらんと判斬とつ
かゝりての事なり
月よりやの事なり 上の事なり
亦日か月やうとありし事の
由りての事なり
の由りての事なり 中家の

此夕のしひはくつりてきり

月影も月一夜中を輝り　いさ乃

面ハ中まはるしや哥とまはけて月れ

るやて月をきり下よハ源氏の思

と見ぬぬまはるりり中まのなきて

ぬまはるりのぬまはるり

龍也人の　山根月よ初道とをぬ

つとまぬぬ人のゆかりありしや

かゝるいとととより

木枯のちくぬつげほ　久しくの

まにちりくしてまのまのま

とあ〜〜此吹とハかんぬまはるり

筆や〜〜　ゆひの月水ハま

はま〜〜まはるり人ハまハりてし

乃乃と憂りし　教なつぬまの

見物うのくねぬてま〜ぬまて

みまのぬまはるれ

院乃しやま〜乃乃　清園忌のりて

し〜ま　清園忌　此心忌乃此事へ

まよぬぬぬま　中まハなり

ワ〜あ〜まはる〜　此まハ

書り〜まはるり

すらつちりとの一うはあし終と

かのめりしとちりりしうりせり

言のやうしてしりきとせり

中まの法八悔一孫不定のりりり

中まのふら越へぬまへし法

りりりりりり

庭の庭し 庭はうとせり

らとのりり 竹とあきて経とつじ

先帝の法とせり 中まの文門と

へ奉る日 へる人の日して候り

菊はちあり 採薪及菓蔬隨時恭敬興

ゆとりりりりり 奉物とはこの

しきけとせりりり

はねふたぬしとせりりり 記者同と

ぬくわしりりりりり

横川の信都 中まの法とせり

とりのてしとせりりりりり

いと葉はせりりりりり

らてのりりりりり

名香の煙と 中ま焼ゆしあは

はるりの方りりり

歩りりりりりりりり 中ま

侍々ありあられありし
月のとむむき井とくして 源氏の心

ありあり書井ハ中まろがあしあひ
て都率あしあしこの望ありい世の
屋うしハあまは侍りのあり

大方れあましは守くハ いふ又出
まあり下白くあらしあり

いふありは 引寄る見又まは
あまのんたれ

殿あくま 二条院あり
まはは侍位あくま 中まの心事ん

をりしういひはきんよ 記者の心ん
ろくまかりめまも 源氏ホマ業
内まのれやん 殿院の諫園のま
あらしあり

あいえし 紅葉あまあしはをり

あらしあり 女遊のハ毎年二月十五日
あらしあり 男遊のハ三月十五日
日あり毎年ハ三月十五日のまよ
そりくろのあり

むつかり事ハ終て 源氏のま
あらしありのあり

まのうらむらこし 三条ま事し

何と馬もろりや 指記云白子同系中

ま給酒禄於察官二月七日席馬涉

後んすり申し年始白歎と凡五八邪氣

と去しつるこのとる白控と云く馬八陽

の歎りれ八半の知し先由傳んあり

むらひのち殿よ ち殿ハ三条北中とせり

三條ま事しハ二條とむらひとせり

じへんあり 考し同根りうり終りん也

凡るむらひあり海古ハ伝あり

りもろり海古の物と 源氏の由り

りもろりままよろり球海人のまり

りよれれかきり

ありし世乃名あさしりさ 海終と

よれんまろりハ源氏のねろりゆと

かびてし見ままろりまの浦終の

くしやめつとるり

らる日とひおとせ ねまろり北方ろり

のりあり

はらまのり 考考まのり

大方の道程せくまの法もろり

せくま 考考まのりてか階と

き年方よりよまの侍さよりりと
ハニ文の年爵はより院の侍始
もゆなりよりあり
ニまとは

いほしかり侍位よりなりよりよりことま
きよりあぬは

^何侍封ち上より二子元三ま各あむ百戸
^{一孫}入道よりと入道のまより
より侍封よりと不可改より戸氏
よりりあ元百戸よりハ氏元より
よりりりりよりと封元よりと

氏元よりハ田園のよりや

和侍よりよりよりと中まより
い殿の人より 源氏の侍方人より

りのより ^{より} ^{より} 致仕よりハ七十より

てお仕よりよりきよりい間判
より車よりと先祖の廟より

あり故より懸車乃終よりと表

よりハよりハ仕よりきよりと表と
云詞より書よりとよりより

への例もよりあり

かよりより 後字より

とらひしひとらひのこゝろ 二条大將七頼
清子女はらひしひとらひ 右村大將息長
はらひのこゝろのれと 三位中納言
まゝしてとらひと 三位中納言のつらひ
のつらひとらひと 右村大將息長
らぬ力ハありてとらひ

春林の清談經 源氏物語のつらひ

禁中二條のつらひとらひとらひ

のんちとらひ 右集のつらひとらひ

何のつらひとらひとらひとらひ

世中しとらひとらひとらひ

世に薬とらひのつらひとらひ

ちとらひ 文庫とらひ

こゝろとらひ 右集のつらひとらひ

つらひとらひとらひとらひ

つらひとらひの 階庭薔薇入夏開 五月

中將のつらひ 右梅吉大將

つらひとらひ 催馬手律

のつらひとらひとらひとらひ 右村のつらひ

乃末のつらひとらひ

中將つらひとらひとらひ 右村のつらひ

つらひとらひとらひとらひ

おとよびかきつらふのあまの

中將の言なり蒿薇と見くごのり
うとよびかきつらふのあまの
うしと規をけつらふのあまの
地各部しとつれと我ハけさうのり
見ゆるとよあつらふのあまの
とよと深氏の言なり同く
見ゆかりくまきつらふのあまの
三信中將乃深氏より酒飲まなり
とよとつらふのあまの
おとよびかきつらふのあまの
記者の記なり

はつゆふいさめさう

りふふいさめさうやあまの
はつゆふいさめさう

文王世子 周公旦自稱詞云文王子武

王亦成王伯父我於天下誰不賤一
休三握髮一飯三吐哺只失天下賢
士也 深氏の言なり周公旦よつて
の言なりすうとつらふのあまの

成王乃何なり 記者の記なり安也と云

冷泉院とつらふのあまの
とよとつらふのあまの

ゆきこゆりてハ流氏伯又とてゆり
せんり勿律より又冷泉の流代よ
りりて世のまじりとも流氏のうら
みありりりりりりりりりりり
と流とも流氏密通の事あるハ
其ら流下りゆりて成王の何よ
てこのの折らんやと流んと
我説成王のとのと流氏よりと
成王ハ成王の子り流とも流高ハ
ゆりりといゆりりりりりりり
ゆりや其及ハとのうハ此時ハ

いまハ世流ゆりいゆりり
流是よ不限患辟論りあり
申す

流まを 雲多部流ハ二才きりあり
まさいのまを 弘徽殿より

と乃ハ君をくら 二条大屋の息連を
まのまの流方ハ 弘徽殿の流方

中将まのまげり 中ねハ大屋の息
まのまげハ白太右またまより

まのまげハ白太右またまより
まのまげハ白太右またまより

うんとんよ 弘徽殿の侍事ん
ふゆのこころまじき

ニ条右衛門のプリンクニ
てまじ人のプリンクニ

このこころ 朱雀のまじき

かくゆきせし時かみり

世君とと かく月采乃事なり

そのこころいふと

月采の曲布きしあきなり

こころ見くしけあきと

さけりゆきとあきし人君

世間かみ人なりあきと

ゆきとあきと

と升てふとあきと

かく月采のこころ

とこれとあきと

こころあきと

こころあきと

おぼしきとあきと

あきとあきと

かく月夜あきの侍門の侍

りあきとあきと

かみの後くまゆ、 軽囀へ

てしうくすまのころり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 'かみ', 'くま', 'ゆ', 'て', 'し', 'う', 'く', 'す', 'ま', 'の', 'こ', 'ろ', 'り'.

花散里

巻名はなごりて早とといまてあ
源氏木宮本の夏五月の事之賢
木巻のまも同じ夏のもうま
六月ほりのりあや夕倉此はあ
ころり花ハハハ 白物目みほりめを
りといのりあやうりりし

麗系殿 相画の帝此女沛奄あ里

のり咲いもんあめたり
人の法あくらのと ちれらる里とるし
くちるしとあけまんちうて

和琴本多し能鳴調といぬありしを
よりのちわりのこころをねてあまを
ありのや

まひりたひ風 多吹るや風
秋のひの舟とよあし月名

まひりの比ゆはしやして あつひ
つぼころひあつりよまひり

あひいあひあひ い候又ハの時
のあひひりしけりりあま世本を

ふれあひあひあひあひあひ
よのつりえうまのままぬ くらさる

くらさるりあひあひあひあひあひ
あひあひあひあひあひあひあひ
郎とよあひあひあひ 源氏のこころ
あひあひあひあひあひあひ

よくくくくく地祇とて

花らりく庭の本葉とてあひあひ
地好も思くもうらなかのうしあ
なゆかほまふ月毎のそと源氏と
まひあひあひあひあひあひあひ
惟光いあひあひあひあひあひ
このらあひあひあひあひあひあひ

のふらりしきりやせむらひしし
さしあひのやちんをてし
かハさんしあひもあたらし
せやいさしり

はくしのぬきら ち武のむじあて

そゆの巻しのゆかしたる

廿日の月ウーしりかひの本さうま

女月のちちら庭の折を金じ

いしきりてう ちあひのうらふら

都云いしきりてうちよのすめ

うら花の番はまうーこ いきん

して巻の巻るん

こようあうまあうこりもかてそよこ

とせ 花らりしの方てしけいお

こりすしあひてハワさしん

いあいのりうらまはま又こい

この数さよのせゆりしり

りしりりせり終と ちあひのり

ちり世ハ伴ふひりさうりあう

ちしりさうりや

人のぬききりる者ハ 女師のさあ

りりつさうらふらあめしなれら

あつちやあつちやまをせまら

かひんといふはこひなり かのこひは

いせり方とらむとらむる前こひなり

あつちやあつちや

うらなふは余の人よあつちや

あつちやといふ 是よりハあつちや

せらぶら せらぶらといふ

あつちやといふはあつちや



